

年間第十一主日

第一朗読 サムエル下 12・7-10, 13

答唱詩編 典 114 ①②④ (詩編 32・5abef, 7, 10+11)

第二朗読 ガラテヤ 2・16, 19-21

福音朗読 ルカ 7・36-50

2013.6.16 9:30 ミサ

小田武彦神父 (大阪教区)

神さまは、わたしたちを救いへと招き、わたしたちが救われるために必要なものを全て準備してくださっています。でも、神さまは一方的に強引にわたしたちを救おうとなさるのではなく、わたしたちが救われるには自分に何が必要なのかに気付いてほしいと望んでおられます。たとえば、わたしたちが赦していただくためには、まず自分の罪を認める必要があります。ところが、自分のことを振り返ってみると、人の欠点や失敗はよく見えるんです。それなのに、自分が犯した罪はあまり見えない。もちろん、わたしの中にも罪を犯したという自覚はときどきあるのです。あるにはあるのですけれども、すぐに自分で言い訳を思い付きます。そして、自分で自分を納得させてしまう。自分の我儘や失敗はすぐに許せるのです。でも、人の我儘や失敗は許せない、忘れない。自分のことはさっさと忘れるのに、人が自分に対してやった何かいやなことは忘れないし、忘れたと思っけていても、ふっと思ひ出す。

今日の福音の朗読で、ファリサイ派のシモンは、自分の家に招きもしないのに入っけて来て、イエスさまの足元で泣き崩れてイエスさまの足を濡らし、髪でぬぐっている女が罪深い女だっけてすぐに見抜きました。それに一旦気が付いたら、しっかりと自分の中で確認をしていきます。確認をしていくだけではなく、「イエスっけていうのはあれだけ有名なのに、なんで見抜くことができないんだ」と考え始める。でも、その女性が今までどれほど苦しんで、傷付いて、悩んで、辛い思いをしてきたかということについては全く気が付いていなかったようです。そんなファリサイ派シモンに向っけて、イエスさまはたとえ話を始められます。「神さまの望んでおられることに、ひょっとしたらあなたは気づいていないんじゃないですか？ 聡明で賢くて人を見抜く力があっけても、神さまの思いに気付いていない。一番大事なことは、自分の欠点、弱さ、怠りによる罪を自分で認めたら、神さまは赦してくださる、ということ。そのすごく大切なことに気が付いていないのではないか？」。そうおっしゃった上で、イエスさまはその女性に向っけて、「あなたの罪は赦された」と、すごい宣言をなさるのです。大切なことは、自分のやっけたことをしっかりと見つめ、正直に認め、自

覚し、そして「ほんとに悪かった」と思ったら「ごめんなさい」と言うことだと思います。

今日の第一朗読も、まさにそのことを言っています。「聖書と典礼」の下の段を見てください。「第一朗読」という文字の次に太文字で書かれているのは、主題（テーマ）です。その次が、解説です。その解説をちょっと読ませていただきます。「ダビデは紀元前 1000 年ごろのイスラエルの王。家臣であるヘト人ウリヤの妻を奪い、子を身ごもらせたダビデ王は、事の発覚を恐れて、ウリヤを戦場で死なせた」。すごくひどい人だったんですね、ダビデって。でも、そのダビデはイエスさまの先祖として今でも大切にされている人です。「ダビデの子キリスト」って聞いたことがあるでしょう？「マタイによる福音書」の冒頭には、イエスさまの先祖の名前がずらずらと出てきます。そこにはっきりと、「ウリヤの妻によってソロモンをもうけ」と出てきます。旧約聖書でも新約聖書でも、絶対にはずせない出来事があります。それは神さまの目から見たらすごく大事なことです。でもわたしたちの常識で見たらひどい話も少なくありません。そのひどい話の一つが今日の第一朗読です。ダビデは自分のやったひどいことに気が付いていませんでした。それで解説に書かれてあるように、「預言者ナタンは、たくさんの羊を持つ金持ちの男が貧しい男の飼っていた唯一の羊を奪い取ったというたとえ話を語ることによって、ダビデに自分の罪の自覚を促した」のです。ナタンのおかげでダビデはやっとのことで自分のやったことに気付いて、言います。「わたしは主に罪を犯した」と。それに対して、ナタンは、「主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる」と罪の赦しの宣言をします。ここがポイントです。自分で自分のやったことを正直に認める、そうしたら神さまは絶対に赦してくださる。

答唱詩編は、第一朗読を受けとめ味わうためにあります。答唱詩編の詩編 1 行目を見てください。自分が犯した罪を神さまに向かって言い現わし、自分のとがを隠さずに言ったら、主はわたしの罪をゆるし、わたしのとがを清めてくださると、歌います。

福音朗読でも、イエスさまは女性に罪の赦しの宣言をされました。第一朗読でも、ナタンはダビデの罪の赦しを宣言しました。

神さまはわたしたちを救いたいと望んでおられます。神さまが望んでおられるのは、わたしたち一人一人の幸せです。わたしたちを救うために、罪をゆるすために、神さまは心から望んで今日も働いておられます。でも、無理やりに、わたしたちの首根っこを捕まえて、こちらが願いもしていないのに救ってくださるわけではありません。「わたしはあなたを赦したい。あなたを救いたい。でも、あなたの首根っこを捕まえて無理やりに救うようなことはしたくない。自

分のやったことに気が付いて自分の罪を認めたら、わたしは必ず赦す。必ず救う」。それが今日の第一朗読と福音朗読で語られる神さまからのメッセージです。罪深い女はイエスさまのところに来て、公に、人の目前で、堂々と、動作をとおして悔い改めを表明しました。だから、イエスさまも公に罪の赦しを宣言されました。第一朗読と福音朗読とを通して言われていることは、「神さまは必ず悔い改める罪人の赦しを実現する」ということです。

そして、第二朗読で、「でも、はずしちゃいけないポイントがあるんだよ」とパウロは言います。

第二朗読に入る前にちょっと確認したいことがあります。わたしたちは赦されるから神さまを愛するんでしょうか。それとも、わたしたちが神さまを愛しているから赦されるんでしょうか。パウロは、律法を実行することが救われるために重要だと主張する人々と闘っています。「赦しというものは、自分で得ようとして得られるものではない」とパウロは言い切ります。わたしたちが神さまを愛しているから赦されるわけではありません。わたしたちは神さまから愛されているから赦されるのです。わたしたちが赦されるには、まず自分自身の思い、言葉、行い、そして為すべきことを怠ったことを正直に認め、告白する必要があります。「でも、悔い改めることができるのは、実は神さまのお恵みのお陰だということを忘れてはいけませんよ」とパウロは言っています。

第二朗読の4行目に、「なぜなら、律法の実行によっては、だれ一人として義とされないのであります」とあります。わたしたちは、「こうしたら救われるよ」と言われて、「じゃあ条件付きでそれをやろう」というようなことでは、神さまとの正しい関係には入れません。神さまが先に救いたいと望まれ、赦したいと一所懸命働かれ、お恵みをわたしたちにくださっています。そのお恵みによって、わたしたちは、「神さまがわたしを愛してくださっている、神さまがわたしのために御子イエスさまを差し出してくださっているということを分からせていただいて、神さまとの正しい関係に入っていくのです」。それに気が付いたら、「ありがとうございます」と素直になれ、「具体的に何か仕えることをさせてください」というふうに思えるようになります。

今日の福音朗読で、罪の女だと周りの人たちから見られていた女性は、イエスさまの後ろから近付いて、泣きながらその足を涙で濡らし、自分の髪の毛でぬぐい、足に接吻して香油を塗りました。これは赦してくださいというお願いの動作だったのでしょうか？そうではないんじゃないでしょうか？周りから罪人だと言われ、自分でも自分のことを罪深いと認めています。こんなわたしを神さまは救いたいと望んでくださり、働いてくださっているんだとイエスさまは語ってくださった。神さまは、こんなわたしでも愛してくださり赦してくだ

さっているということに気が付いた女性は、感謝の涙でイエスさまの足を濡らし、ぬぐい、香油を塗ったのではないのでしょうか？だからイエスさまは公に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」とおっしゃったのではないのでしょうか？

まず先に神さまの恵みがあります。その恵みに触れたときに、私たちは悔い改めることができます。悔い改めたら、赦しをいただくことができます。そして、赦しをいただいたら、感謝の心から奉仕ができるようになります。仕える具体的な行動が出てきます。その具体的な行動をしていったときに、改めて、神さまは救いを確かなものとして宣言してくださいます。

先に神さまの恵みがあります。先に一所懸命救おうとくださっています。先に赦してくださいます。そんな神さまの思いと働きに触れるように招かれています。何かをやれば救われるという条件のようなものではありません。今日も神さまはわたしたちを赦そうとなさっています。わたしたちを救おうとなさっています。その事実に触れ、赦されていると気付いたとき、感謝の気持ちが湧いてきます。赦されたことへの感謝が、他の方々への奉仕につながってきます。できることを、持っているものを差し出すことができるようにしていただけます。神さまの救いへの招きに応えさせていただける幸せを、今日の聖書の朗読を通して味わっていければ幸いです。